

バーレスクオペラ『ウォントリーの竜』の元歌

高 際 澄 雄

序 バラッド『ウォントリーの竜』

1737年に初演されたヘンリー・ケアリー作詞、ジョン・フリデリック・ランプ作曲のバーレスクオペラ『ウォントリーの竜』は大成功を収めたが、その理由は、別の機会に論じたように¹、その元となったバラッド『ウォントリーの竜』²が人口に膾炙した作品であったためだった。それではその元になったバラッドとはどのようなものだったのだろうか。本論では、わが国ではほとんど知られていないその元歌を詳しく調べたい。

バラッドは、イギリス 16 世紀中期ころから 17 世紀初頭にかけて、民衆の間で歌われた物語詩である。しばらくは、バラッド歌いによって歌い継がれたが、やがてブロードシートに印刷されて売られるようになった。最盛期には数千のブロードシート版バラッドが出版業者組合に登録されていたというが、18 世紀初頭から書籍として選集が出版されるようになり、限られた数のバラッドが読まれるようになった。

バラッドの『ウォントリーの竜』は、1685年にブロードシート版バラッドとして、ランドル・テイラー（Randal Taylor）によってロンドンで出版され、その後選集に収められ、読み継がれていく。

デイヴィッド・ヘイの研究によれば、このバラッドの題材となった事件は、ヨークシャーのシェフィールド近郊のウォンクリフ・ロッジを舞台に繰り広げられた。ヘンリー八世の時代から地域を治めていたワートリー一族（the Wortleys）と領民との間で、十分の一税の収め方に関して争いがあり、最終的にムーア荘に住む弁護士、ジョージ・ブラウント（George Blount）が領民の弁護をして、裁判に勝ったことを、ムーア荘のムーアとウォントリーの竜との争いに転嫁して、茶化しながら、その顛末を語ったものであったという³。

バラッド『ウォントリーの竜』は、バラッド律、つまり弱強四歩格と弱強三歩格を繰り返し脚韻に abcb を持つ 4 行を一まとめとして、バラッド律 2 つで 1 連を形成し、19 連で完結している。以下に、各連ずつ訳を付しながら、考察したい。原作には、連番号は付されていないが、ここでは便宜上付す⁴。

第 1 節 導入部

(Stanza 1)

Old stories tell how Hercules
A dragon slew at Lerna,
With seven heads, and fourteen eyes,
To see, and well discern-a:
But he had a club, this dragon to drub,
Or he had ne'er done it, I warrant ye:
But More of More-Hall, with nothing at all,
He slew the dragon of Wantley.

古からの言い伝え。ヘーラクレスが
レルネーで、7つの頭と、
よく見分けるための
14の目をもつ竜を血祭りに上げた。

でも、英雄は竜を殴る棍棒を持っていた。
でなけりゃ、絶対できなかつた、本当さ。
でもムーア荘のムーアは、何にもなしで
ウォントリーの竜を殺したのだ。

(Stanza 2)

The dragon had two furious wings,
Each one upon each shoulder;
With a sting in his tayl as long as a flayl,
Which made him bolder and bolder.
He had long claws, and in his jaws
Four and forty teeth of iron;
With a hide as tough, as any buff,
Which did him round environ.

竜には猛り狂う2つの翼が、
それぞれの肩から生えていた。

尾には穀竿の長さの針、
ためにますます図太くなった。
長い鉤爪、そして口には
47本の鉄の歯。
皮の硬さはなめし革のごとく、
竜の周囲を取り囲んでいる。

(Stanza 3)

Have you not heard how the Trojan horse
Held seventy men in his belly?
This dragon was not quite so big,
But very near, I'll tell ye.
Devoured he poor children three,
That could not with him grapple
And at one sup he eat them up,;
As one would eat an apple.

トロイの馬を聞いているだろう
腹に70人の男たちを入れた馬。
この竜はそれほど大きくはなかったが、
それに近かったことは、確かだよ。
彼は3人のかわいそうな子供を貪り食った、
抗う力のない子供を
一口で竜は彼らを平らげた、
まるでリンゴを食べるように。

(Stanza 4)

All sorts of cattle this dragon did eat.
Some say he ate up trees,
And that the forests sure he would
Devour up by degrees:

For houses and churches were to him geese and turkies;
He ate all, and left none behind,
But some stones, dear Jack, that he could not crack,
Which on the hills you will find.

牛という牛をこの竜は全部食べた。
樹木を食い尽くしたという者もある。
それに本当に森を
だんだん貪り食うという。
だって家も教会もあいつにはガチョウと七面鳥も同然。
やつは全部食べつくし、後には何にも残さない。
でもジャック、あいつが割れなかった石があって、
丘の上に見られるのさ。

(Stanza 5)

In Yorkshire, near fair Rotheram,
The place I know it well;
Some two or three miles, or thereabouts,
I vow I cannot tell.
But there is a hedge, just on the hill edge,
And Matthew's house hard by it;
O there and then was this dragon's den,
You could not chuse but spy it.

ヨークシャーの麗しきロザラムの近くに、
その場所があるのを我知れり。
2、3マイルかそれくらいだが
正確には言えぬなり。
丘の縁に生け垣があって
その近くにマシューの家がある。
ああ、そこにそのときこの竜のねぐらがあった、
どうしたって見えるのさ。

(Stanza 6)

Some say this dragon was a witch
Some say, he was a devil,
For from his nose a smoke arose,
And with it burning snivel;
Which he cast off, when he did cough,
In a well that he did stand by;
Which made it look, just like a brook
Running with burning brandy.

この竜は魔女だというものもいれば、
悪魔だというものもある。
そは鼻から煙が上がり、
ともに燃え盛る涙を垂らすため。
これを、噴き出すのだ、咳き込む時に、
待ちぶせをする泉の中で。
そんな時、燃え盛るブランディーと流れる
せせらぎのように見えたのだ、その泉が。

このように詳しく調べてみると、バーレスク『ウォントリーの竜』は元歌のバラッドに大きく依存していることが判明する。まず主人公はいうまでもなくムーア荘のムーアだが、第1連に明確に出されている。そして、ヘーラクレスへの言及は、バーレスクオペラには出ていないが、第1幕第3場のムーアの Aria で「ゼノン、プラトン、アリストテレス／ みんな酒瓶の愛好者」とギリシア古典に依拠した歌詞が作曲されたのも、この影響であろう。

第2連のウォントリーの竜の描写は、バーレスクオペラに直接現れるわけではないが、拙論で使用した19世紀のテキストには、明らかにバラッドに依拠したイラストが付されていて、バーレスクオペラの観客も、バラッドの竜の描写を思い描きながら鑑賞していたことは明らかである。おそらく、衣装もこの描写をもとに作成されていたことであろう。

第3連で3人の子供を食らったエピソードを語る第6行から第8行、第4連の第5行は、ガビンズのアリア、およびその後続く村人の合唱にそのまま引用されている。

第5連のロザラム近傍の丘の竜のねぐらへの言及は、場面設定で明言されていることが分かる。そして、第6連の竜の待ち伏せの場所としての泉は、第2幕でムーアが隠れる泉として利用されるのだが、燃え盛るブランディーとともに流れる小川となるという、形而上詩人たちにも匹敵する不自然な喩えで、このバラッドの滑稽さを盛り上げている。この基本性格がパーレスオペラにも継承されているということができよう。

第2節 継続部

(Stanza 7)

Hard by a furious knight there dwelt,
Of whom all towns did ring;
For he could wrestle, play at quarter-staff, kick, cuff, and huff,
Call son of a whore, do any kind of thing:
By the tail and the main, with his hands twain
He swung a horse till he was dead;
And that which is stranger, he for very anger
Eat him all up but his head.

すぐ近傍に猛々しき騎士住めり。

この騎士を町中の人々が声高に褒め称えていた。

そは、その騎士、格闘、六尺棒術、蹴り、殴り、怒鳴り、
罵り言葉、なんでもかでもやれたから。

しっぽとたてがみを、両の手でつかみ、
馬を振り回して、殺したのだ。

しかもさらに不思議なことには、その怒りの故、
全てを食い尽くしたのだ、首を残して。

(Stanza 8)

These children, I am told, being eat:
Men, women, girls and boys,
Sighing and sobbing, came to his lodging,
And made a hideous noise:
O save us all, More of More Hall,
Thou peerless knight of these woods:
Do but slay this dragon, who won't leave us a rag on,
We'll give thee all our goods.

あの子どもたちが食われてしまったので、
男も女も、女の子も男の子も、
ため息をつき、すすり泣き、騎士の館に赴いて、
激しい声を上げたという。
ああ、わたしたち全てを救って下さい、ムーア荘のムーアよ。
この森の並びなき騎士よ。
この竜をなぶり殺してください、着るボロ服さえ残さないのですから。
私たちのものは何でも差し上げます。

(Stanza 9)

Tut, tut, quoth he, no goods I want;
But I want, I want, in sooth,
A fair maid of sixteen, that's brisk and keen,
With smiles about the mouth;
Hair black as sloe, skin white as snow,
With blushes her cheeks adorning;
To annoynt me oe'r night, ere I go to fight,
And to dress me in the morning.

おいおい、と騎士は言う、物など何にも欲しくない。
ただ欲しいのは、ほんとに欲しいのは、
十六才の麗しの乙女。機敏で情に厚く、

口元には微笑みを湛え、
髪は烏の濡羽色、肌は純白の雪、
頬に射す紅が、その飾り。
戦いに出る前に、夜中香油を塗ってくれ、
朝に着付けをしてくれれば、な。

(Stanza 10)

This being done, he did engage
To hew the dragon down;
But first he went, new armour to
Bespeak at Sheffield town;
With spikes all about, not within but without,
Of steel so sharp and strong;
Both behind and before, arms, legs, and all o'er
Some five or six inches long.

これが果たされると、騎士は竜を
打ち倒すと約束した。
でも最初に新しい甲冑を注文するため
シェフィールドの町に出かけた。
ありとあらゆるところに刺をつけた。内側でなく外側に、だ。
鋼鉄で、鋭く強く、
前にも後ろにも、腕にも、脚にも、一面に。
五、六インチほどの長さにして。

(Stanza 11)

Had you but seen him in this dress,
How fierce he look'd and how big,
You would have thought him for to be
Some Egyptian porcupig:
He frightened all, cats, dogs, and all,

Each cow, each horse, and each hog;
For fear they did flee, for they took him to be
Some strange outlandish hedge-hog.

騎士のこの姿、猛々しく、巨大に見えた
この甲冑姿を見たら、
騎士を何かエジプトのヤマアラシと
思ったかもしれないのだ。
騎士は、猫も犬も、なんでもかでも、
牛も、馬も、豚も、恐ろしがらせた。
恐怖のあまりそれらは逃げた。だって騎士を
何か見知らぬ、異国のハリネズミだと思ったからだ。

継続部に移ると、バーレスクオペラ『ウォントリーの竜』との違いが明らかになる。バラッドでは、いきなりムーア荘のムーアに言及されるが、バーレスクオペラでは、これもバラッドには登場しないガビンズが娘をもっていることになり、その娘マージェリーがムーアの力量を褒めたたえるのである。第7連では、ムーアが馬を怒りのあまり殺して、食べたことになっているが、ケイによれば、この部分は、ワートリー一族の横暴に腹をたてた住民の一部が自分たちの地主の馬を殺し、首を掲げた抵抗の歴史に言及しているという⁵。第7連の村人の嘆願「ああ、私たちを救ってください、ムーア荘のムーアよ」は、この一行がバーレスクオペラの方にも転用されているが、他は変えられている。

第9連の乙女の細かな描写も、バーレスクオペラには採られていないが、マージェリーに対して、夜中に香油を塗り、朝に着付けをするように頼むところのみ、採用されている。

第10連と第11連の甲冑の描写は、バーレスクオペラには全く採用されていないが、当然、当時の観客は、このハリネズミやヤマアラシに喩えられた甲冑の外観を知っていたのであろうし、舞台の衣装としても使われたのであろう。すでに言及した19世紀のテキストには、まさにこの描写に従った甲冑のイラストが、竜との戦いで用いられているのである。

第3節 展開部

(Stanza 12)

To see this fight, all people then
Got up on trees and houses,
On churches some, and chimneys too;
But they put on trowsers,
Not to spoil their hose. As soon as he rose,
To make him strong and mighty,
He drank by the tale, six pots of ale,
And a quarter of aqua-vitae

この戦いを見ようと、その時、あらゆる人々が
木に登り、屋根に上り、
ある者は教会堂、煙突さえ登ったものもいた。
だがみんなズボンを穿いていた。

ホーズを汚したくなかったのだ。騎士は立ち上がるや
自分を強くし、活力を得るために、
伝えるところでは、ビールを六杯、
ウイスキーを四分の一杯飲んだそうだ。

(Stanza 13)

It is not strength that always wins,
For wit doth strength excell;
Which made our cunning champion
Creep down into a well;
Where he did think he would drink,
And so he did in truth;
And as he stoop'd low, he rose up and cry'd, boh!
And hit him in the mouth.

いつも勝つのは力とは限らない。
だって知力が力に勝るから。

それでわれらが狡猾なる戦士は
泉の中に身を潜めた、
きっとここで水を飲むと考えて。
そう、本当にあいつは飲んだ。
それであいつが身をかがめると、騎士は立ち上がり、バーと叫んで、
あいつの口に殴りを入れた。

(Stanza 14)

O quoth the dragon, pox take thee, come out,
Thou disturb'st me in my drink:
And then he turn'd, and s...at him;
Good lack how he did stink!
Beshrew thy soul, thy body's foul,
Thy dung smells not like balsam;
Thou son of a whore, thous stink'st so sore,
Sure thy diet is unwholesome.

ああ、と竜は言い、こんちくしょう、出てこい、
貴様はわしの水飲みを妨げようというのか。
それからあいつは振り向いて、騎士に向かって糞たれた。
なんてひどい臭いがしたことか！
おまえの魂は呪われろ。おまえの体は不潔だぞ。
おまえの糞はバルサム香の臭いがしないぞ。
売女の息子、お前はひどい悪臭がする。
きっとおまえの食べ物不健全なのさ。

(Stanza 15)

Our politick knight, on the other side,
Crept out upon the brink,
And gave the dragon such a douse,
He knew not what to think:

By cock, quoth he, say you so: do you see?

And then at him he let fly

With hand and with foot, and so they went to 't;

And the word it was, Hey boys, hey!

駆け引きに長けたわれらの騎士は、一方で

縁に這って出て、

竜に思いっきり一発お見舞い。

竜は何も考えられず、

戯けたことを言うものだ、と竜は言い、見ていろよ。

それから騎士に向かって

手と足で殴りかかり、ついに二人の戦いが始まった。

発した言葉は、さあ来い、さあ。

(Stanza 16)

Your words, quoth the dragon, I don't understand:

Then to it they fell at all.

Like two wild boars so fierce, if I may,

Compare great things with small.

Two days and a night, with this dragon did fight

Our champion on the ground;

Tho' their strength it was great, their skill it was neat,

They never had one wound.

貴様の言葉は、分からんと竜が言う。

二人はまったくのところ

巨大なものを小さな動物で喩えてよければ

二頭の凶暴なイノシシのように争い始めた。

二日と一晚、この竜と戦ったのだ、

われらの戦士は地面の上で。

二人の力は大きくて、二人の技は冴えていたが、

一つとして傷を負うことがなかったのだ。

第 12 連では元歌とバーレスクオペラの違いが際立つ。バーレスクオペラ第 2 幕の最後で、戦いに出る直前、確かにムーアは「六クウォートのビールと一クウォートのウイスキー」を飲むが、村人全員が見るところでは戦わない。彼は、マージョリー一人が木の上から見ているだけで、竜を誘きよせるのである。ところが元歌では、村人全員が見る中で戦う。しかも、バーレスクオペラの中心的な話題、つまりムーア、マージョリー、モークサリンダの三角関係は、まったく存在していない。ここから、ムーアとマージョリー、ムーアとモークサリンダ、マージョリーとモークサリンダ、の二重唱、そして、その三人の三重唱が、ケアリーの創作であること、そしてそれらの歌唱に音楽をつけたランプが、巧妙にイタリア歌劇の定形表現を茶化したことが判明するのである。これは、元歌をよく知る観客にとってなによりの喜びであったことであろう。

第 13 連に進むと、泉に身を潜め、突然飛び出して相手の意表を突く作戦は、バーレスクオペラにも踏襲されている。しかし、次に続く下ネタは、上品な観客の好みを考えて、避けられてる。

第 14 連から第 16 連は、バーレスクオペラと全く異なる。なんと二人の戦いは一晩と二日に渡り、しかも二人とも傷を負わないのである。

従って、マージョリーとモークサリンダを登場させ、むしろそちらに劇の中心を置いたことに、ケアリーとランプの成功の鍵があったというべきであろう。

第 4 節 終結部

(Stanza 17)

At length the hard earth began to quake,
The dragon gave him a knock,
Which made him to reel, and straitway he thought,
To lift him as high as a rock,
And thence let him fall. But More of More-Hall,
Like a valiant son of Mars,
As he came like a lout, so he turn'd him about,
And hit him a kick on the a ...

とうとう硬い地面が揺れだして、

竜が騎士に一撃お見舞い。
すると騎士はころころ転がりながら、すぐに考えた。
あいつを岩のように持ち上げて、
ずどんと落とそうか。でもムーア荘のムーアは
戦いの神マルスの息子らしく、
まるで馬鹿者のふりをして、竜をぐるりと回し、
一発けつに蹴りを入れた。

(Stanza 18)

Oh, quoth the dragon, with a deep sigh,
And turn'd six times together,
Sobbing and tearing, cursing and swearing
Out of his throat of leather;
More of More-Hall! O thou rascal!
Would I had seen thee never;
With the thing at thy foot, thou hast pricked my a... gut,
And I 'm quite undone for ever.

ああ、と竜は、深いため息とともに叫ぶ。
そしてなめし革の喉からすすり泣き
涙を流し、呪い、毒づきながら
合計六回回転した。
ムーア荘のムーアよ、ああおまえ乱暴者。
貴様を見なければよかったなあ。
貴様の足についている刺で、わしの尻の腸を突き刺した。
それでわしは永遠におしまいだ。

(Stanza 19)

Murder, Murder, the dragon cry'd,
Alack, alack, for grief;
Had you but mist that place, you could

Have done me no mischief.
Then his head he shaked, trembled and quaked,
And down he laid and cry'd;
First on one knee, then on back tumbled he,
So groan'd, kickt, s..., and dy'd.

人殺し、人殺し、竜は叫んだ。
悲しい、悲しい、嘆くべき、
貴様があの場所を外してくれれば、貴様は
わしに何の危害も加えられなかったのだ。
それから竜は頭を振り、震えそして揺れ、
身を横たえ、泣いた。
最初に片膝を付き、それから仰向けに転び、
激しくうなり、蹴り、糞をして、死んだ。

結末部は、再びバーレスクオペラと同じになる。最後に尻に蹴りを入れることで、竜は負けるのである。だが、元歌は実に詳しく負ける様子を描いている。すでに甲冑のところで詳しく述べられていたが、ムーアは脚にも刺をつけていて、その刺を竜の尻の穴に突き刺したのである。もちろん、これを上品な観客の前であからさまに描くことはできない。それで、元歌の表現を示唆するに留めたのである。観客の多くはこの元歌を知っていたことはもちろんであり、少し経つとワードブックにも、元歌が掲載されるようになる。

しかし、ケアリーとランプの脚色はそれだけではない。バーレスクオペラでは、ムーアが泉から飛び出すだけで、竜は驚き、負けてしまう。元歌の激しい戦いは、ムーアの知能戦に置き換えられ、見事な竜頭蛇尾となって、観客の好みに変えられているのである。そして、拙論で触れたとおり、まるで『魔笛』のパパゲーノとパパゲーナの二重唱を予見するようなとぼけた味わいの会話と、最後の村人の、オラトリオを茶化した大げさな合唱で幕を閉じている。元歌の見事な脚色だということができよう。

結び 元歌との比較から明らかになるバーレスクオペラ『ウォントリーの竜』の 特質

バラッド『ウォントリーの竜』を詳しく調べてくると、元歌それ自体が極めて滑稽な作品であることが分かる。ケイが分析したように、おそらく上に触れた以上に、バラッドは村の騒動を劇的な象徴を用いながら、さまざまなエピソードを表現しているのであろう。そしてその人口に膾炙した作品を、巧みに利用しながら、ケアリーとランプはイタリア歌劇、そしてオラトリオへの当て付けとしたのである。

しかし、音楽だけを聞いても十分に面白いのであるから、さらに舞台背景があり、衣装が用いられ、動作が加えられたバーレスクオペラは楽しめた作品だったろうと推察される。

この後、ヘンデルはイタリア歌劇では『ファラモンド』と『セルセ』、オラトリオでは『サウル』と『エジプトのイスラエル人』そして、『快活な人、沈思の人、中庸の人』という傑作を生み出す。これらは当時必ずしも人気を博することはなかったが、作品として鑑賞してみると、優れた作品であることが判明する。そこには、この『ウォントリーの竜』に見られる、闊達な表現意識の充実した作品が、演劇界で次々と生まれてことに関係している。惜しむらくは、この変化を、ヘンデル研究者が十分に理解しているとは言い難いのである⁶。

1. 「バーレスクオペラ『ウォントリーの竜』における詩と音楽」、『宇都宮大学国際学部研究論集』第37号、pp.13-28、2014年1月
2. 正式題名は、『ムーア荘のムーアとウォントリーの竜との壮絶なる闘いの真の物語』"A True Relation of the Dreadful Combate between More of More-Hall and the Dragon of Wantley"であるが、本論では略称を使用する。
3. バラッド『ウォントリーの竜』については、以下の論文に詳しく論じられている。David Hey, "The Dragon of Wantley: Rural Popular Culture and Local Legend", *Rural History* Vol. 4 No. 1 (Cambridge University Press, 1993), pp.23-40.
4. テキストは上掲書からの再引用。このテキストは、H. B. Wheatley, ed., *Reliques of Ancient English Poetry...by Thomas Percy, D.D., Bishop of Dromore* (London, 1827), Vol. III, p. 279の引用であり、スペリングは19世紀初頭の様式に従っている。
5. 上掲書、p.35.
6. すでに述べたことだが、貴族歌劇団が設置されたことは、ヘンデルへの敵意のみで解釈されているが、自由な闊達な演劇公演の気風が生まれつつあった時期に、ヘンデルの劇団だけでロンドンの観客を満足させようとする自体に無理があった。第1期

の王立音楽アカデミーには、何人かの作曲家がいて、競うように異なる作曲理念にもとづいて作曲公演が行われていた。却って演劇界に創造性が生まれた時に、イタリア歌劇の多様性が失われたのである。貴族歌劇団の設立にはその対応の意味もあった。

(本論は平成 25-27 年度科学研究費補助金研究「18 世紀前半イギリスにおけるオラトリオ形成への笑劇とバーレスクの影響」(課題番号 25370267) の研究成果の一部である。)